

ふるさと紹介

東に「ニヶ城山（標高483.2m）」と「松笠山（374.6m）」を望み、西に清流太田川が流れ、南北に長くつらなる自然の恵みにはぐまれた「ふるさと」は、近年大規模な住宅団地の開発と道路網などの整備により、広島市のベッドタウンとして発展を続けています。

太古には、この地域は海であったと考えられており、いくつかの貝塚が存在することでもそのことがうかがい知ることができます。太田川沿いの小高い丘には、弥生時代から古墳時代にかけての墓らしきものを物語る遺跡・古墳が多く出土しています。その中で、松笠山の麓の「小中田古墳群」の第1号墳からは、邪馬台国の卑弥呼の鏡ではないかと言われる「三角縁神獣鏡」が出土し、当時の大和政権と深いかわりがある有力者の墓であると考えられ、平成8年（1996年）に国の史跡指定を受けています。また、昭和49年（1974年）に広島県の史跡指定を受けた「西蔵寺山墳墓群」など、この地で発掘される遺跡の石室には多数の河原石が使用され、この地方独特の文化が形成されていたことがうかがえます。

江戸時代の初めの頃の洪水で太田川の流れが変わり、現在のような形となりましたが『馬が小便ばりや小田の土手は切れる、切れてなるまい胡麻の種』とうたわれるほど太田川が氾濫を起こすたびに、土手が切れて大きな被害を被ってきた歴史を推察できます。

明治22年（1889年）の市制・町村制施行により、矢口村と小田村が合併して口田村が誕生しました。口田の名は、矢口村の「口」と小田村の「田」をあわせて命名したものです。また、明治28年（1895年）には深川村から独立して岩上が所属する落合村が誕生しました。

昭和20年（1945年）8月6日、広島市に原子爆弾が投下され、一瞬にして20万人の尊い命が奪われ市域が全滅しましたが、爆心地から10kmのこの地も、爆風により屋根瓦が飛び、窓ガラスが壊れるなどの大きな被害にまいりました。当時の口田国民学校（現在の口田小学校）と落合国民学校（現在の落合小学校）は、全身やけどを負うなどして避難してくる人々の臨時の収容所となりました。

＜伝説＞

わしは言わんが、われ言うな （夜山のお地藏さん）

昔、岩の上から矢口へ越える街道の時に、高さ2メートルばかりの地藏堂があった。この峰は、うっそうと茂る松林に囲まれる寂しい山道で、童貞氏の残党で十郎太という男が住み着き、追いはぎをやっていた。

ある晩、一人のおじいさんが米の入った袋を背負ってこの峠にさしかかったときのこと。地藏堂の前まで来ると、待ち構えていた十郎太は、地藏堂の陰から飛び出して切り殺し、金品を取り上げてしまった。そして、ひよい見上げると地藏様と目が合った。「今したことを見とつたろうが、誰にも言うちゃいけない」。十郎太は地藏様に向かって思わず口走った。すると、「わしは言わんが、われ言うな」と地藏様の声。

それから一年後、矢口の方に出かけた十郎太は一人のおじいさんと道連れになった。二人は道々、世間話をしながら歩いていたが、地藏堂の前に来たとき、十郎太はふとそこに立ち止まった。一年前のことを思い出し、なぜかそれをやべりたくてしかたがなくなったのである。「去年の今ごろ、じいさんをばっさり切り殺して金や米を取ってしまつたんじゃが・・・」。十郎太は自分の秘密を何もかもべらべらとしゃべってしまった。

そのおじいさんは、一人になると腹の底から恐ろしさが込み上げ、ひざ頭がガクガク震えるのをどうすることもできなかった。そして、翌朝、代官所へ駆けつけて、タペのことをありのままに訴えた。

役人が十郎太を縛でくくり、地藏堂の前を通るとき「十郎太、わしは言わんがわれ言うな。歌も過ぎれば身の破滅」と地藏様の声がはつきりと聞こえたという。

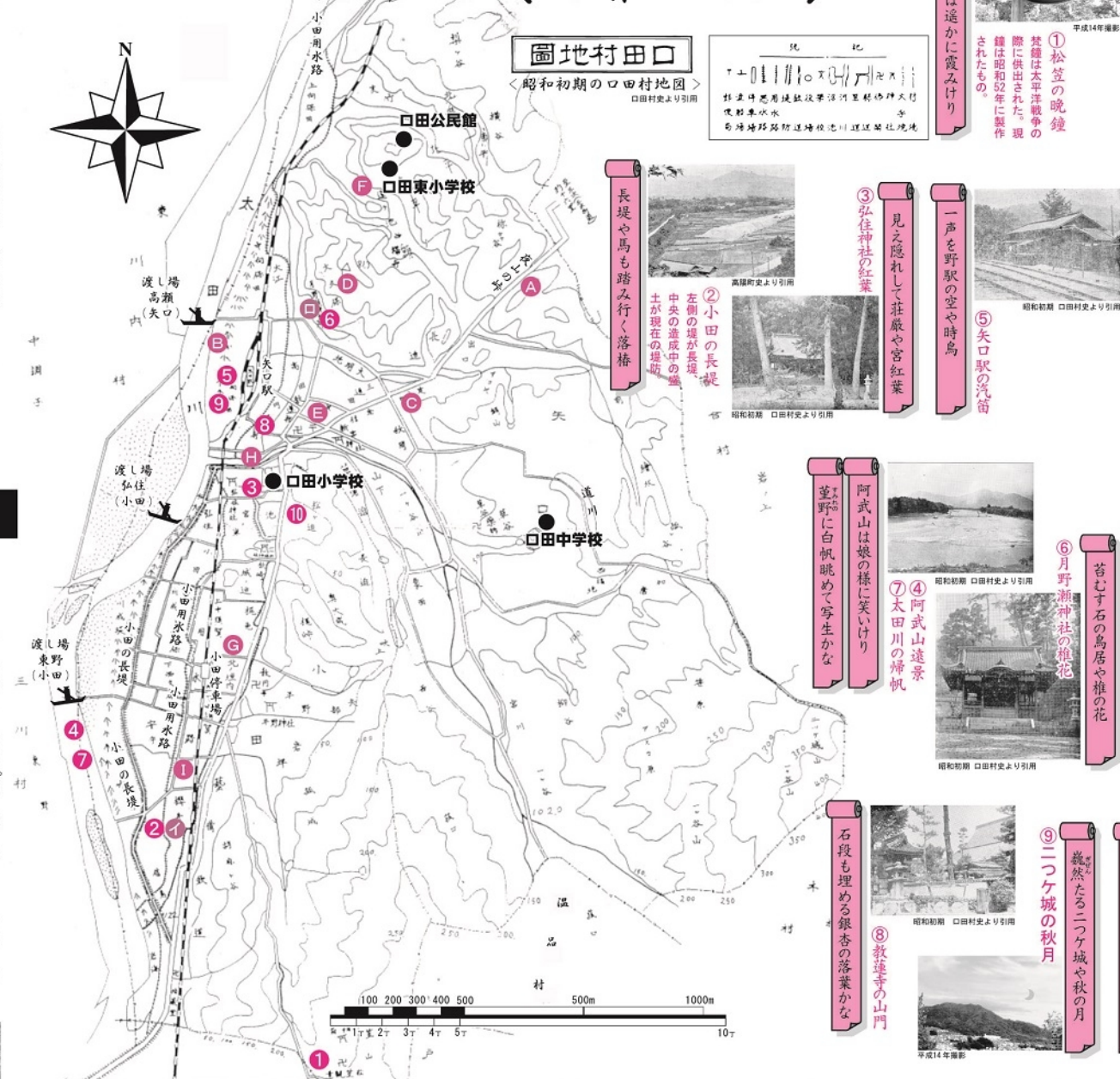
この伝説は、戦国時代からこの地域に伝わるものです。

地域の古老によれば、『夜山の峠はたいへん寂しいところ、山越えをする旅人が「追いはぎ」におそれこれを見ていたお地藏さんがその「追いはぎ」をしかつたところ、こつた「追いはぎ」がお地藏さんを強かつたいたため、首がとれた』との言い伝えもあります。このお地藏さん、今は矢口にある草苔の山崎楽師堂の境内に他の5体の地藏さんと一緒に並んで立っており首をセメントで修復してあるのが「夜山のお地藏さん」といわれています。

発行年月日／平成15年（2003年）1月
発行者／（財）広島市ひと・まちネットワーク 広島市口田公民館
〒739-1734 広島市安佐北区口田四丁目9番19号
TEL・FAX（082）842-7744
kuchita-k@hitomachi.city.hiroshima.jp
編集スタッフ／今中 康一・岡野 武夫・木戸 敬明・伊達 工・
中田 知行・西村 晴夫・館屋 忠幸・米澤 松夫（五十音順）
イラスト／口田中学校美術部
参考文献／口田村史、高瀬町史、安芸・備後の民話、ふるさと口田111
資料協力／（財）広島市文化財団

※限られた時間の中で精一杯取り組み、このようなマップが完成しました。スタッフ全員初めての試みであり、内容については十分とは言えませんが、少しでも地域の歴史に関心を持っていただければ幸いです。

昭和初期の 口田村十勝（勝景・勝地）



口田村地図

＜昭和初期の口田村地図＞
口田村史より引用

松笠の鐘は遠かに霞みけり



①松笠の晩鐘
其鐘は太平洋戦争の際に供出された。現鐘は昭和52年に製作されたもの。



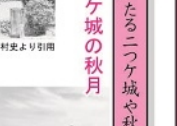
⑤矢口駅の汽笛



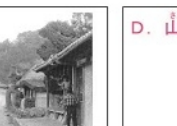
⑦阿武山遠景



④阿武山の煙帆



⑦阿武山の煙帆



⑦阿武山の煙帆



『口田村十勝が詠まれた場所 をたずねてみよう』

口田村十勝は、「口田村史」の中の芸術史の項に記載されています。十勝は、口田村の川内龍月（本名は貞雄）氏が昭和の初め、村内の自然を観察して回り勝景・勝地を10か所選定し、その景観を詩歌に詠んだものです。

十勝が詠まれた場所をたずねながら、昭和初期の時代や十勝の世界に思いをさせて見ませんか。歴史マップ編集スタッフが、十勝の詩歌が詠まれた場所を想定してみました。

昭和初期の口田村 （小田・矢口）のようす

「口田村史」によると、昭和初期の口田村は、世帯401戸、人口1,788人で、3世代同居の家族が多く住んでいました。口田尋常高等小学校（現在の口田小学校）の児童数は330人、教職員は9人の規模でした。校舎そばには農家にとって大事な用水池であった鳥越池がありましたが、今はその姿を見ることはできません。

村民のほとんどは農業従事者で、農家の数は346戸でした。農家では、主要産品として広島菜とジャガイモに力をいれていました。広島菜漬は京阪神方面にまで出荷され、口田村の広島菜漬として有名になりました。

昭和6年（1931年）にはじめて電話がつきましたがはじめは郵便局と役場にあるだけでした。

県道は小石のちらばった道路で、自転車や馬車が主役でした。小田の奥には農家が数戸あっただけで周囲は田んぼでした。また、矢口から岩上へは寂しくて険しい夜山峠越えの県道を行かなければなりません。交通機関では、太田川を渡るためには橋がありませんでしたので、口田からは渡し舟を利用していました。渡し場は、高瀬（矢口）・弘住（小田）・東野（小田）の3か所がありましたが、昭和29年（1954年）に安佐大橋が完成し、渡し舟は廃止されました。大正4年（1915年）に開通した芸備鉄道（現在のJR芸備線）の戸坂駅と矢口駅の間に、昭和4年（1929年）ガソリン自動車専用的小田停車場がつくられました。終戦のころに廃止され、今はありません。

今日、団地の造成とともに遺跡・古墳が多く発見されていますが、当時は平野古墳、湯釜古墳がわかっていただけでした。

「口田村史」について

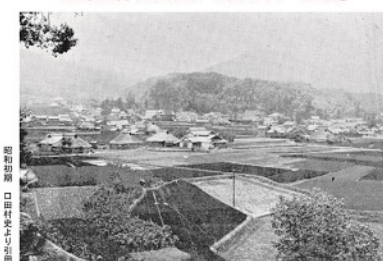
「口田村史」は、川内龍月氏が地元有志の援助のもとに十数年の歳月を費やして、昭和8年（1933年）に完成させた口田村の地理と歴史をまとめた貴重な郷土誌です。

昭和初期の口田村の風景

イ. 小田地区
「桜井付近（小田鉄橋付近）より見る小田全景」



ロ. 矢口地区
「月野瀬神社付近より見る矢口全景」



口田村地図に
記載されている
今は見ることが
できなくなった
建物・場所

